

ビザンツ知識人とヒューマニズム

和田 廣

1) はじめに

ア) 教育制度 — ヒューマニズムという言葉の意味を「ギリシャ・ローマ古典への回帰とその研究」と広く理解すると、ビザンツでは我々が言葉の最も広い意味で「知識人」と呼べるような人々がビザンツ・ヒューマニズムの担い手と考えることが出来ます。そしてこれら知識人の執筆並びに教育活動がヒューマニズムの実践ということになります。

ところで知識人の養成は、なによりも教育制度の充実いかに掛かっていたことはいうまでもありません。教育制度の充実という点でビザンツ帝国は、同時代の西ヨーロッパ諸国に較べてきわめて有利でした。なぜなら、ビザンツ帝国はゲルマン人の民族移動の直撃を西方世界ほど強くは受けなかったからです。従ってビザンツ国内では、帝政期ローマ以来の伝統的な教育制度が連綿として受け継がれる事が出来たのです。即ち、初等教育から高等教育までの教育制度、それぞれの教育段階に応じた教育施設、教材と教師、そして卒業生の就職などの一連の教育環境が整っていたと言えます。以下に見るようにビザンツ知識人の層と幅が厚く広がったのは、また彼らの執筆・研究活動が多岐に渡っていたのは、そうした伝統的な教育制度の継承と維持にその要因の一つがあったといえましょう。¹

教育制度の中心的担い手である教師には、大別して二種類のグループがあったようです。村や町、あるいは国家から給与を受ける、いわば公務員型の教師と、修道院や自宅などで私設の塾を主催する私教師の二種類がそれでした。公務員型の教師は、市参事会、国家と契約を結び、私教師は生徒の両親と契約を結びました。私教師も公務員型教師もそれぞれギルドを形成していた模様です。町や国家が教師と契約する際には、演説会などの形での競争が行われ、採用が決定されました。

教師は、教える教科の段階（初等教育、中等教育、高等教育）により初等教育教師、中等教育教師そして高等教育教師の三つの身分に分かれていたようです。

初等教育は六乃至七歳くらいから始まります。子供達は、町や村にある「小学校」や「塾」で読み書きを習います。ギリシャ語のアルファベット、発音、書き方を聖書、賛美歌あるいはホメロスの作品などをつかって習うのです。小学校の先生は、「村の先生」と呼ばれ、その社会的地位はさして高くありませんでした。小学生が三十人いると、先生の給料は職人とほぼ同じくらいになったといえます。体操、道徳、習字そして算数を教える先生の給料は、村の先生の給料のほぼ倍くらい高かったといえます。小学校の先生は、中等あるいは高等教育の先生と違って、国家の賦役や納税義務から免除されることはありませんでした。

中等教育は十二乃至十三歳位から始まったようです。中等教育はギリシャ語の文法を習うことが中心でし

¹ ビザンツ帝国の教育制度および教育施設については、H.I. Marrou, *A History of Education in Antiquity*, Madison, Wisc. 1982. G. Buckler, "Byzantine Education", in: *Byzantium*. Ed. N. Baynes and H. Moss. Oxford, 1948, p.200 ff. P. Speck, *Die kaiserliche Universität von Konstantinopel*, München, 1974.

た。教材はホメロスやメナンドロス、トゥキディデスなどの古典作品で、生徒はそれらの作品の暗唱を行い、ひとつひとつの言葉の解釈や文法の説明を受けました。中等教育を受け持つ教師は、国家の課す賦役、行軍途中の兵士の宿舎割り当てや兵役を免除されました。

高等教育では修辞学の修得が主たる内容のひとつでした。高等教育の教師は「修辞学者」(Rhetores)、「弁論家」(Oratores)、「賢者」(Sophistes)或いは「教授」(Professores)等と呼ばれました。授業では、ホメロス、メナンドロス、トゥキディデス、デモステネス等の作品が取り上げられ、それらの内容かつ文法、それに修辞学上の技巧などが解説・訓練されました。学生は、卒業後は弁護士、政治家、官僚、学者などになるとする者達でした。高等教育の教師の給料は、初等教育の先生の五倍であったといわれています。中等教育の教師と同じく、高等教育の教師も、諸々の国家に対する義務から免除されていました。

高等教育の教師は名声を得るに従って、高給で移籍することがしばしばありました。例えば四世紀最大の修辞学者リパニオスは、アテネ、コンスタンティノープル、ニカイア、ニコメディアそして最後は生誕の地アンティオキアで教えました。

イ) 教育施設 — 首都やその他の大都会では教育施設も多く存在しました。有名なのはアテネのプラトン・アカデミー(哲学と法学)、アレクサンドリアのムセイオン(法学と神学)、ペリュトスの法律専門学校、エデッサの神学校、ガザの修辞学専門学校、コンスタンティノープルの国立大学などがそれです。施設は町の場合には市参事会員が集まった会堂、ローマ風呂に併設されている大広間、市場などに併設されている列柱式ホール、教会や修道院(例えばコーラ修道院)などであったといえます。

首都では、ハギア・ソフィア教会付属の「神学校」で神学が教えられたようです。医学は同じく首都のサンブソン施療院などの病院で、そして後にはパントクラートル病院などでも、現場の医師により「ガレノス」流の医学が医学生に教えられた模様です。

高等教育施設で突出していたのは、首都コンスタンティノープルにおける「国立大学」の存在でした。この施設では、教員が国家から給与を受けていた点で国立と呼べるのですが、この施設がカリキュラムその他の点で現代的な意味での国立大学と呼べるか否かは議論のあるところです。医学と神学以外の「世俗の学問」が、この「大学」で教えられていた模様です。もっとも現在では、この大学がビザンツ全時代に渡って存続した、という説と、その存続は断続的であったという説と二つに分かれていて、結論を得ていません。

425年2月27日、皇帝テオドシオス二世は、大学開設(或いは改編?)の勅令を発布しました。首都の「雄牛の広場」の右手に、「カピトリオン講堂」を新築したのです。大学には、31名の教授が招聘されました。ラテン語修辞学教授3名、ギリシャ語修辞学教授5名、ラテン語文法教授10名、ギリシャ語文法教授10名、哲学教授1名、法学教授2名という教授陣でした。いわば国立大学の教授達の中で、6名の教授、即ちギリシャ語文法教授2名、ラテン語文法教授1名、修辞学教授2名、法学教授1名が管区長官待遇を受けました。その他の教授達は、20年間勤勉に勤め上げ、模範的生活を送り、演説と古典作品の注釈で名をあげれば、同様の待遇を20年後に受けることが出来たのです。教授達はギルドを形成し、特別の制服を着用していました。授業は原則として午前中のみ行われ、卒業試験はなく、教授の推薦状がこれに代わるものとしてありました。

次に我々が首都の大学について知るの、九世紀後半のことです。副帝バルダスは百科全書派の学者フォティオスと数学者レオンを筆頭にして、首都の大宮殿内の「マグナウラ宮殿」で法学と哲学を中心とした諸教科を教授させました。バルダスの「大学」が、テオドシオス二世帝の大学の連続なのか、或いは改編なのか、新設なのかは不明。またそれがいつまで存続したのかも不明です。

首都の大学についての最後の情報は、1045年のものです。それによれば皇帝コンスタンティノス九世モロマコス、首都に大学を新設(改編?)させたというのです。法学をヨハネス・クシフィリノスに(「法の守護者」)、哲学をミカエル・プセロス(「哲学者の執政官」)に教授させました。この大学ではいわゆる「欠けることのない教養」(Enkyklos Paideia)が教授されました。これは西方で言う[自由の七科]にほぼ相当する科目です。ギリシャ語文法、修辞学、弁証法、算数、幾何学、音楽、天文学がそれです。コンスタンティノス九世の大学についても、これが前二者といかなる関係にあるのかは不明であり、またこの大学がいつまで存続したのかも不明です。

ウ)知識人 — ビザンツにおける知識人とは、ギリシャ・ローマの古典作品を教材として、ギリシャ語の文法と修辞学を中心とする高等教育を受けた人々を意味します。即ち、言葉の最も広い意味における教師と学者、弁論家、ソフィスト(賢人)および哲学者と呼ばれた人々がいわば職業人としての知識人といえましょう。四世紀の修辞学者リバニオスとその弟子アフトニオスに始まり、十四世紀後半の修辞学者トーマス・マギストロスなどがそうした職業人としての知識人といえましょう。

しかしビザンツにはこれ以外に、高等教育を終了した後、生計を立てるための職業につく傍ら、他方で文才を発揮し、旺盛な執筆活動を展開したいわば兼業知識人が多数おりました。例えば六世紀を概観しただけでも、東方軍区総司令官ペリサルリオスの法律顧問官でありながら、大著『戦史』を著し歴史家として名を残したプロコピオス、修道士でありながら六世紀最大の聖人伝集を残したスキトポリスのキュリロス、シナイ山のカタリーナ修道院院長であり、同時に名著『天国への階段』を著したヨハネス・クリマコス、宮廷官房長官のポストにありながら、『歴史(現存するのはその中の『対外使節報告書』のみ)』を著したペトロス、弁論士でありながら、プロコピオスの『戦史』の後を引き継ぎ、同じく『歴史』を著し、ほかにも『ダフニアカ』なる題名の詩集(現存せず)を刊行し、歴史家および詩人として名声を残したアガティアス・スコラスティコス、コンスタンティノープルで修辞学の教師をする傍ら、名著『官職論』を著したヨハネス・リュドスなど枚挙に暇がありません。

これら執筆活動を展開した知識人の大きな特色は、自らの知的な活動を自由にかつ創造的に発展させるといよりも、ギリシャ・ローマの古典作品の咀嚼と応用を第一に心がけ、執筆に際しては伝統的な修辞学上の技巧を凝らした点にあります。

古典作品の咀嚼とは、古典作品の新たな解説、注解やパラフレーズの作成、難解な語句や熟語の理解、格言などの解釈、まねな文法事項の説明、さらには新たに写本を作製することなどを意味します。ホメロス、ヘロドトスあるいはトゥキディデスといった有名な古典作家ほどビザンツ知識人の「咀嚼」の対象でした。

例えばホメロスについて言えば、イリアスの写本だけでも四世紀には17冊、五世紀には16冊、六世紀には6冊と多いのです。十世紀以降ホメロスに対する関心が再燃すると、イリアスとオデュッセイアの完全な

写本と注解が再び刊行され始めます。十一世紀の皇帝イサキオス一世コムネノスは『ホメロスが記載しなかった事柄について』を著し、十二世紀の詩人で、修辞学者でもあるヨハネス・ツェツェスは、イリアスを6632行の韻文で、オデュッセイアを3109行の韻文で寓話風物語に仕立て上げています。そしてその後長大な注解をそれぞれの作品につけてもいます。このようにホメロスに対する関心は、全ビザンツ時代を通じて失われることはありませんでした。

古典作品の応用とは、古典諸作品中の名句、名言、珍しい語句、難解な語句或いは熟語を、そして時には文章の一部をそのまま自分の文章に取り入れる事を意味します。さらにある主題についての記述を換骨奪胎することも、また文章や文体そのものを模倣することもしばしばでした。例えばカイサレイアの歴史家プロコピオスの『戦史』における「ペスト」の記述は、トゥキディデスのそれを受け継いでいるのです。それは現代風に言えば「模倣」或いは「剽窃」となるのですが、ビザンツ人の解釈によれば、古典作品の引用や模倣のない「著作」は著作ではなかったのです。

ビザンツの知識人はその執筆活動に際しては、読者を説得するための技術として「修辞学上の技巧」を最大限活用し、同時にホメロス、ヘロドトス或いはトゥキディデスといった古典作家をつねに手本としました。これら古典作家達は、ビザンツ知識人にとっては「永遠の師」でありました。歴史家プロコピオスは、その大著『戦史』を執筆するにあたり、トゥキディデスを模範とし、十二世紀の女流作家で、皇帝アレクシオス一世コムネノスの皇女アンナ・コムネナは名著『アレクシオス一世伝』を著す際にトゥキディデスとポリピオスを手本としました。

こうしてみるとビザンツ知識人は、古来より伝えられてきたギリシャ・ローマの諸作家とそれらの作品にいわば「縛られていた」とも言えましょう。ギリシャ・ローマの古典作家はそれほどビザンツ知識人にとって圧倒的かつ絶対的な存在であったのです。他方ビザンツ知識人は、西ヨーロッパでギリシャ・ローマ古典文芸への回帰とその研究が叫ばれる数百年も前から、古典への回帰とその研究を日常的に実践していたのです。そこで今回のシンポジウムの主題である「歴史におけるヒューマニズム」という観点からビザンツを眺めてみると、ビザンツを「ヒューマニズムの源流」と位置づけることが出来るかと思えます。

2) アフトニオスの『修辞学教書』(Progymnasmata)

修辞学の教材の中でビザンツ知識人が使用した頻度の最も多かったのは、ヘルモゲネスとアフトニオスのそれでした。特にヘルモゲネスの教材については、『ヘルモゲネス全集』と名付けられた全集があり、その注解は聖書注解と同じくらい多く出版されました。しかしアフトニオスの教書は、修辞学の教科書としてはヘルモゲネスのそれを凌ぎました。教書は16乃至17世紀まで修辞学の教科書として使用されました。そこでここでは、リバニオスの弟子アフトニオス(Aphthonios)の『修辞学教書』(四世紀末から五世紀初頭か?)を参考にしたいと思います。²アフトニオスによれば、修辞学を修得しようとする学生は、ギリシャ語文法の授

² アフトニオスとその修辞学教書については、Art, "Aphthonios", in: *RE*. I, 2. col. 2797-2800. G.L. Kustas, *Studies in Byzantine Rhetoric*, Thessalonike, 1973. 特に Chap.1. Hermogenes, Aphthonius and the Neoplatonists. H. Hunger. *Die hochsprachliche profane Literatur der Byzantiner*. 1. Band. 2. Kap. Rhetorik. 3. Rhetorische Praxis: Progymnasmata, München, 1978. pp.92-120.

業（中等程度か）を終えた後で、次の12の段階を踏んで修辞学を学習したといえます。

第一段階ではイソップの寓話(μύθος)等を教材にして、話の内容を長く引き延ばしたり、逆に短くしたりして、作文の練習をします。さらに、別の美しい羽を持つ鳥の羽で自らを飾ったカラスの逸話等を取り上げ、虚栄心の虚しさをキリスト教的教訓として学生に教え込んだりもしました。イソップの寓話は特に文体の模範としても多数利用されたのです。

第二段階では、例えばオデュッセイア物語りなどを題材として短い物語(δουήγημα)を主題に作文の練習をします。アフトニオスは、ここでは登場人物、行動、時間、場所、原因、方法を取り上げるものとし、その長所は明確さ、短さ、信頼性そしてギリシャ語以外の外国語を使用しない点にあるとしました。リバニオスは四十一種類の短い物語りの例を挙げていますが、その内で三編が歴史的な主題であり、残りの主題はすべて神話からとっています。

第三段階では、ある人物の発言或いは行動を例にとり、その有用性(χρησία)を論じるという練習です。アフトニオスに依れば、そこでは登場人物への賞讃、主題の解説、主題として取り上げた理由の説明、反対意見の否定とその根拠、同様の事例の引用、模範的な事例の引用、古代作家の証言の引用そして簡単な結びの言葉から成るといえます。例えばイソクラテスの発言「教養の根は苦い、だが教養の実甘い」についての有用性を論じるという練習などです。

第四段階では、金言、格言および諺(γνώμη)を用いて、その有用性を論じる練習です。その手順は第三段階におけるそれと同一です。金言や格言などは要請或いは警告を内容とするものが多く、例えば「目には目を、歯には歯を」という格言が犯罪者や独裁者にたいする警告としてどれほど有用かを論じます。これらの金言、格言や諺はエウリピデス、ヘシオド、ピンダロス或いはソフォクレスの作品などから引用されることが多かったといえます。

第五段階は、ある主張に対する賛成とそれに対する反論(ἀνασκευή και κατασκευή)の練習にあてられます。皇帝ヘラクレイオスの法律顧問であり、歴史家および修辞学者としても名を残したテオフラクトス・シモカッテスは、「命には限界がある」と「命には限界がない」という二つの相反する命題に対して、それぞれ賛成と反対意見を述べよという課題を残しています。アフトニオスによれば、第五段階ではそれぞれ相手の意見の不明朗さ、非現実性、不可能、矛盾、非有用性および不適切さを指摘することとしています。

第六段階では、特に裁判での弁護或いは告発演説において有罪或いは無罪の主張をより一層際立たせるために使われる「常套句」(κοινὸς τόπος)の修得を練習します。修辞学者であるミュラのニコラウスは「裏切り者、仕事を嫌う者、不義を働いた者、父親殺し」に使用される常套句と「使節としての修辞学者の有用性」についての常套句を残しています。ちなみに「仕事を嫌う者」は盗人よりも悪質である、という社会通念に基づいています。

第七段階は、賞讃と非難(ἐγκώμιον και ψόγος)を内容とする文章の練習に宛てられます。賞讃は個人やその性格、動物や植物にまで及びます。特に皇帝賞讃演説等では皇帝の誕生時の前兆、幼少や青年期の教育、生活ぶり、功績、対外関係、国家への貢献、逝去の状況などが語られます。これに対して非難演説は、「悪魔は高慢の父」などの引用句を用いた叱責に終始しました。

第八段階は、比較(σύγκρισις)をつかった作文の練習にあてられます。題材は、個人の性格、家族、町、教育、生活、行動、死などいずれのものでもよいのです。例えば神話の世界からはアキレウスとヘクトールの比較、修辞学者ではデモステネスとアリストイデスの比較、政治家ではペリクレスとテミストクレスの比較など。植物ではオリーブとナツメヤシの比較、四季では夏と冬の比較、性格では卑怯と怠惰の比較なども好まれました。最も有名なのは、マヌエル・クリュソロラスの「古きローマと新しきローマの比較」です。

第九段階は、特定の或いは一般的な人物の性格描写(ἡθοποιία)にあてられます。アフトニオスに依れば第九段階では性格描写と感情描写の二種類があり、その文章は簡潔かつ明快でなければならないといひます。ピザンツ修辞学者は性格描写を大変好み、詩人ヨハネス・ゲオメトロスは『故皇帝ニケフォロス二世フォーカス』の性格描写を、ミカエル・プセロスは『追放された女帝ゾエについて』の性格描写を残しています。アフトニオスも「殺害された自分の多くの子供達を目にした瞬間のニオベ」や、アレクサンドリアのセヴェロスは「ヘクトールの屍を目にしたアンドロマケ」などの主題を残しています。

第十段階は描写(ἐκφρασις)にあてられます。その対象はヘルモゲネスに依れば人物、海戦や陸戦などの行為、平和や戦いなどの時代、町、港湾或いは沿岸などの場所それに四季があるといひ、時間的経過の描写とともにその文章は正確かつ緻密でなければならないといひます。さらには祭り、芸術作品、庭や狩りなどの題材をも好まれました。またこのジャンルでは、ベッサリオンが著した彼の故郷トレビゾンドの町の描写が有名です。

第十一段階では、個別命題を一般論的に解釈(θέσις)する練習にあてられます。例えば理論的命題では「天空は球形か否か」とか「太陽は炎でできているのか否か」などがあり、現実的命題では「人は結婚すべきか否か」とか「旅は海路によるべきか否か」などを論証する訓練を行います。それらの命題は既に世間で承認されているものではなく、賛否両論に分かれるような命題です。しかしこの第十一段階は教材として授業では用いられたが、実際の修辞学では応用されなかったようです。

第十二段階は、法律の原案に対する判定(νόμου ἐπιφορά)を下す訓練に宛てられます。これも理論的訓練として教室でのみ用いられたことが多かったといひます。アフトニオスが残した命題の一つは、「不倫の現場を取り押さえられた男性は殺害されてしかるべきである、という法律は否定されるべきか否か」についての意見表明を求めています。

以上がアフトニオスが勤める十二段階の修辞学修得のためのステップです。アフトニオスはさらに、「演説」(文章)には次の7つの要素が必要であるとしています。それは1) 明確さ(σαφήνεια)、2) 品位と偉大さ(ἀξίωμα καὶ μέγεθος)、3) 入念さと美しさ(ἐπιμέλεια καὶ κάλλος)、4) 速度或いは短さ(γοργότης)、5) 質の良さ(ἡθος)、6) 真実(ἀλήθεια)、7) 勢い(δεινότης)の七要素です。

3) 知識人ニケタス・コニアテスの修辞学的著作

修辞学の任務は、聴衆を説得することにあります。アリストテレスに依れば修辞学は三種類に分類されました。民会における政治的演説(γένος συμβουλευτικόν)、裁判所で多く応用されてきた告発・弁護演説(γένος δικανικόν)そして賞讃演説(γένος ἐπιδεικτικόν)がそれでした。しかし地上におけるキリストの唯一の代理者

たる万能の君主が支配するビザンツ帝国では、民会の存在もなく、裁判においても「皇帝即ち生ける法」とされたため、政治的演説と裁判演説という自由な演説は影を潜めざるを得なくなりました。三種類の伝統的な修辞学の中で残ったのは、「美辞麗句を重ねた賞讃演説」を主流とする修辞学でした。

そのもっとも大きな特色は、誇張された、リズム感を持つ演説でした。なぜなら、作品は黙読されるのではなく、「朗読」されたからです。従って演説をする者は、演説方法、声の抑揚、顔の表情、身振りなどが指示されたのです。そのほかには文章を小さく、細かく分割する手法、象徴や暗示を多数使用、対照法、奇策などがありました。

もう一つの特色は、古典の伝統に忠実なあまり、修辞学的技法で語られる著作、特に賞讃演説などでは、真理や自己の確信や見解を犠牲にするという傾向があります。また史実や具体的名称などをあげることに乏しい、という傾向も見られます。これは語られる人物や事件が、既に「既知」のものとしてされているからですが、ここにもビザンツ修辞学に飾られた著作には史料価値が低い、という評価を研究者から受ける要因があります。

いずれにせよビザンツ知識人は、ホメロスをはじめとする古典作家とその作品の咀嚼と応用を実践し、さらにアフトニオスやヘルモゲネスの修辞学の技巧を駆使して膨大な数の作品を神学および世俗文学の分野で書き残しました。中でも修辞学の技巧と古典作品の応用が最も多く見られるのが、皇帝賞讃演説をはじめとする各種の賞讃演説(τὸ ἐγκώμιον)、弔辞(ὁ ἐπιτάφιος λόγος)と追悼演説(ἡ μονοδία)、君主の鏡と呼ばれる帝王学(ἡ κεφάλαια παρανεπικά)を説いた著作、伝記(ὁ βίος)、叙述(ἡ ἐκφρασις)そして皇帝への歓迎の辞(ὁ προσφωνητικός)をはじめとする各種の演説でした。³

ここでは十二世紀最大の歴史家(『歴史』21巻)であり、第一級の修辞学者にして当代随一の神学者(『正統信仰の武器庫』27巻)でもあったニケタス・コニアテス(1155年或いは1157年~1217年春或いは夏)の二種類の異なった修辞学上の著作を紹介してみたいと思います。ひとつは純粋な文学作品としての即興演説『冬が夏よりも優れていることを証明するための比較と対比』であり、もう一つは国家論とも言える『皇帝イサキオス二世アングロスに捧げる皇帝賞讃演説』です。

ア) 即興演説『冬が夏よりも優れていることを証明するための比較と対比』⁴

ニケタスが皇帝秘書官であった頃(1185年~89年) 駅通局長(交通および外務大臣)のデメトリオス・トルニケスが皇帝イサキオス二世の指示により修辞学に興味を持つ知識人達のために宮廷で弁論大会を開催しました。このような弁論大会や即興の演説会は宮廷や劇場でしばしば行われ、修辞学上の技巧が競われました。ここでは二人の皇帝秘書官が選ばれ、即興で夏と冬の優位を論じ、両者の比較論を展開しました。ニケタスの演説は、「不利と思われる事柄を有利に展開する」という修辞学の任務を明らかにしてくれます。二

³ ビザンツにおける修辞学については、Kustas, a.a.O.および H. Hunger, a.a.O.の他に、H. Hunger, *Aspekte der griechischen Rhetorik von Gorgias bis zum Untergang von Byzanz*. (Sb. Österr. Akad. Wiss. phil.-hist. Kl. 277, 3) Wien, 1972. H.G. Beck, "Antike Beredsamkeit und byzantinische Kallilogia." in: *Antike und Abendland* 15. 1969. pp. 91-101.

⁴ 即興演説の本文および解説は、"Aus einem Redewettkampf. Vorzug des Winters vor dem Sommer." in: *Kaisertaten und Menschenschicksale im Spiegel der schönen Rede. Reden und Briefe des Niketas Choniates*, Übersetzt, eingeleitet und erklärt von F. Grabler, *Byzantinische Geschichtsschreiber*. Hrsg.v. E. Ivanka. Bd.XI. Graz-Wien-Köln, 1966. pp.195-205.

ケタスは、冬が健康、命そして平和の象徴であり、夏は浪費、盗みそして略奪の象徴であるとしています。そして冬の有利を強調し、通例は不利とされている冬の優位を導き出します。この時の即興演説の公式の題名は、『冬が夏よりも優れていることを証明するための比較と対比。この主題は宮廷において名誉称号セバストス保持者にして駅逓局長の地位にあったデメトリオス・トルニケス殿より、当時皇帝秘書官であった著者ケタスに与えられたものである。これに対する反論は次席皇帝秘書官により行われた。』となっています。以下に本文を抜粋で紹介いたします。なお本文中の二人のアレクサンドロスとは、アレクサンドロス・ヌメニウ及びアレクサンドロス・ペロプラトンを指し、この二人はラオディケイアのポレモンとともに紀元後二世紀の著名な弁論家です。

かつて、太古の昔には、ああ、あらゆる人類の中で最も賢く、その名も高き皇帝よ、芸術のパトロンよ、あらゆる優秀さを一身に集めておられるお方よ、即興演説は国中至る所でもてはやされました。当時はあの二人のアレクサンドロスの全盛時代でしたし、弁士がのぼる舞台ではポレモンの声が鳴り響きました。だがあの素晴らしい遺産はどこに行ってしまったのでしょうか？古来からの伝統的儀式の際にも、ちょうど不死鳥のように、その姿を見かけることはほとんど無いのです。もちろん今日では即興で言葉をほとばしらせ、雄弁に物語る弁士の姿を見ることはありませんし、入念に準備された演説を行う弁士すら見ることはないのです。けれども、かの素晴らしい風習が我々の生活から全くその姿を消し、立ち去り、かの弁士達とともに死に絶えてしまい、弁士達の口から即興の言葉が発せられなくなるのを傍観するつもりはありません。我々の同時代人の中からも灰の中から炎を燃え上がらせる人物がいるとすれば、それは、皇帝陛下、貴方が最初で最後のお方であり、貴方こそが即興演説をする弁士のためにのろしを打ち上げてくださるお方なのです。貴方の即興演説と躍動感に溢れ、同時に威厳ある話しぶりは、まるでくぼんだ岩から美しく、音を立てて流れ出る泉のようですし、ポールが坂道を素早く駆け下るようでもあります。私は、今こそ即興演説がかつての栄光を取り戻す時であると確信いたします。そしてすべての人々に、それが内容のない、単なるお話しや、嘘で固められたおとぎ話ではないことを見せる時であると確信いたします。貴方の即興演説が貴方の才能を開花させ、つい先頃までは疑いの目で見られていたことを、今や貴方ははっきりと同時代人と後世に見せつけることとなるのです。嗚呼、貴方は言葉をいかに自由に操ることがお出来になるのでしょうか。貴方の口からはペリクレスにも似た言葉の雷が鳴り響きます。そして怒濤のように押し寄せる思想の波、選び取るのに苦しむほど多くの表現！そしてこれらよりもっと驚かされるのは、貴方は自由な即興演説において長く考え込むこともなく、まるで本の頁をめくるように、いともたやすく演説を組み立ててゆかれます。そして貴方が演説で同じ文章を繰り返すときは、それは言葉を軽々と組み換えることが出来る舌の柔らかさであるか、筆写生が貴方の言葉を何度か聞き返したかのどちらかなのです。

皇帝よ、貴方はこれほど難解な課題をどうして我々のように無能な者に課すのでしょうか。このような難解な課題は貴方しか解くことが出来ないというのに！貴方に並び立つことが出来る者など一人もおりません。それにこの知識人の方々がお集まりの席で、ムーサイの神々の集まる席では、後日、それもずっと後になって我々の即興演説が修正され、刊行されれば、皆様方はそれで満足されるのでし

よう。けれども皇帝よ、貴方の御指示に従わないわけには行きません。それで我々は、ちょうど戦闘の指揮官の号令に兵士が力を得るように、貴方のご臨席に力を得て、この難解な課題の解決に立ち向かうこととします。我々は貴方のお姿を拝見しながら、貴方の即興演説を真似て、課題に取り組むこととします。そして産みの苦しみを味わうこととします。

人は不当にも気のつかない間に冬を咎め、夏を好み、夏を褒めようとしします。だがそれが真理とは全くかけ離れた判断であることをほとんどの人が気がついておりません。そして最も美しいものを間違っ
て判定して平気である、つまりより良いものよりより悪しきものを選択していることに気がついており
ません。なぜなら、四季のなかで冬こそ地上におけるすべての人々に有用な財産の源であり、起源であ
るのですから。これに反して夏はこれら良きものを破滅させ、衰退させる元凶なのです。冬は春の魅力
を生み出す素であり、その創設者でもあるのです。これに対して夏は春の魅力を傷つけ、その破壊者で
もあるのです。夏は他人の畑で出来た素晴らしい収穫物で自分を飾り立てているだけです。そして他の
季節が夏のために作り上げたものを投げ捨てるのです。夏はちょうど考えが中途半端で、未熟な人間と
同じです。

冬には大地が懐を開き、鋤を迎え入れ、その胎内に種を宿します。種は冬の胎内で出産のために長い
時を過ごします。そして結晶を胎内に暖め、適切な期間保護し、豊饒で、有り余るほどの収穫をもたら
します。冬はほんのわずかな耕作でこの上ない収穫をもたらすのです。冬にはかすかに草も生え、植物
も少しづつ生長しはじめ、色鮮やかとなる花々も生まれ出てきます。冬には太陽の熱が長期間にわたっ
て大地を暖めます。もしそうでなければ、冬は大地という胎内を暖かく保護することは出来ませんし、
大地が力と能力に満ちてものを生産し、生み出すことは出来ません。それだからこそ、すべてのものが
大地の底から芽を出し、姿を見せ、成長するのです。もし冬がなければ、色鮮やかな衣服を纏い、誇り
高いまなざしで辺りを睥睨する春は四季の中の王とはなり得ないのです。春は、冬を略奪し、冬の持ち
物を我がものとしします。まるで間違った判決で他人の所有物を我がものとする人間のようにです。なぜ
なら本当のところ、冬こそ大地の土を滑らかにし、花や植物の美しい色を混合し、事前にすべてのもの
の色彩を用意し、壮麗な衣服を整えてくれるのです。

それが冬なのです。夏は、言ってみれば、盗人に似ています。なぜなら夏はすべてのものの共通の母
である大地を裸にし、花が身につける色鮮やかな衣服さえ脱がせてしまうからです。夏はバラの垣根も
容赦しないし、スミレの苗床も保護しようとはしません。夏は、まるで乳母から赤子を取り上げてしま
うように、苗床から花を奪い取ってしまいます。夏は恥知らずなトラキア人に似ています。トラキア人
は燕の舌を切り取り、ナイチンゲールをその住まいから追い払ってしまうのです。夏は、牧草を刈り取
る人間にも似ています。夏は北風と同じようです。夏は、ナルシスを呑みこんだ泉のためにヒュアキン
トスを岩越しに投げつけるのです。

私はもっと多くの事柄を述べることも出来ます。けれどもこれまで述べてきた事柄だけで、冬を勝利
に導くことが出来ましょう。なぜなら一部がすべてを暗示するからです。ちょうど洋服の糸一本、ライ
オンの爪一つそして冬の雪がそれらのすべてを物語るのですから。

イ) 賞讃演説『皇帝イサキオス二世アングロスに捧げる賞讃演説』⁵

次に紹介するのは、同じくニケタスによる皇帝賞讃演説です。演説の契機は、ニケタスが仕える皇帝イサキオス二世のヴァラキア族征討でした。即ち、1186年初頭、ブルガール族のペタルとアセン兄弟が反乱を起こしました。これに呼応するかのようバルカン山岳地帯にすむヴァラキア族とドナウ川一帯に住むクマン族が反乱に合流し、帝国領土を蹂躪しました。これに対して皇帝イサキオス二世は数回にわたって征討軍を指揮し、出陣します。ここで言われている出征は、本文にある「アラマン族の撤退直後」、即ち第三回十字軍の通過後(1190年3月)とあるので、1190年3月以後のことと思われます。ニケタスの賞讃演説は、出陣する皇帝のために宮廷で朗読されました。この演説の公式の題名は、『名誉称号セバストス保持者、書記官長、最高位の法務官、行政および法律監督官のポストを歴任したニケタス・コニアテスが主君イサキオス二世アングロスに捧げる皇帝賞讃演説。ニケタスはこの賞讃演説を帝国最高裁判官に任命された直後に著す。』となっています。以下にその全文を紹介します。

神に似た皇帝、あなたは我々の下を離れ、蛮族追討のために出征されようとしておられます。皇帝のご出征を聞き、我々は驚愕し、我を忘れてしまいます。皇帝のお側にいることが叶わず、皇帝のお力の傍らにいらなくなるのですから。皇帝よ、あなたは昼の光である太陽が運行ごとく、活動されておられます。あなたは我々の上空を駆けめぐり、北方の空に向かわれます。そして蛮族の闇を蹴散らされ、反乱を起こす輩を征服されるのです。皇帝よ、あなたはこの世の太陽のごとく我々に命と光をお与え下さい。あなたは神にも似たその額から汗をぬぐう暇もなく、戦いの神アーレスの鎧を纏われるのです。皇帝よ、あなたは支配者のいと高き、高貴な玉座の飾りであらせられます。皇帝よ、あなたは蛮族アラマン(=ゲルマン)の狡猾な襲撃をうち砕き、その身に引き受けた心労から回復するいとまもなく、次の遠征に行かれるのです。そして貴方は幾夜となく野営を恐れず、一日中鐵の鎧甲を身につけておられます。

昨日も、一昨日も、あなたは先見の明を発揮され、イストロス河を南下し、ローマ人を襲うスキタイ人の奇襲を当初から防ごうとされ、これを実行されました。その時は、プロボンティス海峡に浮かぶ軍船の数があまりに多く、軍船が背後の海を隠したので、海峡は陸地と化したようでした。今や深く渦巻くイストロス河はローマの軍船を運び、ローマ軍は順風を受けて航行しております。わが軍船はイストロス河にある多くの小島に波を打ち返し、イストロス河は、詩編にあるように、わが軍船に拍手を送ります。なぜなら、イストロス河の波はローマ軍船のオールにうたれたのが何年も前であり、河はローマ軍船を待ちわびていたからです。さあ、ほんの少し待つがよい。イストロス河からは蛮族の雄叫びと苦しみの声がわき上がり、彼らの流す血が黒海に流れ込むことになろう。そしてこの辺りを荒らし回る諸蛮族は、皇帝の偉大な勝利を知ることになろう。

皇帝は、言葉を変えるようにイストロスの蕩々たる流れの色を蛮族の血で変えるであろう。そしてこ

⁵ 皇帝賞讃演説の本文および解説は、"An Kaiser Isaak II. Angelos bei dessen Auszug gegen die aufständischen Vlachén (1190).", in: F. Grabler, a.a.O. pp.17-23.

の蛮族どもに、わがビザンツ人を襲い、殺戮したために血で赤く染まった男どもにこう呼びかけるであろう。「汝ら蛮族はローマ人に対する悪辣な攻撃を止めよ。汝らは神に似た皇帝と平和について協議するのだ。そして汝らが剣によって滅ぼされる前に、汝らは降伏し、平和をもとめるがよい。」

つい先頃も皇帝はこうした蛮族征討に出かけられました。貴方は表向き休戦協定に従いながら、実際には精神を超人的なまでに奮い立たせ、我ら臣民の不安に配慮されました。この度も貴方は蛮族征討に出征されます。貴方はかのアルキメデスの投石器よりも頑丈な作りの投石器、地面を掘り下げる諸工具、城壁破壊器そしてその他の要塞を破壊する攻城用の器具を携行されます。これまで貴方が陸上や海上であげた戦果は見事なものでした。けれどもこの度の征討は、神のみ旨に叶い、ローマ人に幸運をもたらすでありましょうし、前回よりも素晴らしい戦果を上げることとなるでしょう。なぜなら貴方は、陸上でも海上でも同時に勝利を収める事となるからです。敵の蛮族は炎と水により、即ち燃えさかる戦いの炎とイストロスの波に吞まれてその力を失い、貴方が持つ権威のくびきを喜んで受け入れることとなるからです。この予測される未来像は、考え抜かれた願望と確実に実現される希望を私どもに与えることになるのです。その未来像はさらに、我々臣民に対する神のご配慮と戦闘において常に勝利をもたらす貴方の優秀さを我々に思い起こさせるのです。なぜなら、かつてダヴィデに約束されたことが、今では神が貴方に約束され、その約束が完成するのですから。敵は貴方からは何一つ得ることは出来ず、無法の息子は貴方を違法に扱うことは出来ないのです。我々は、かつての皇帝達が輝かしい勝利を収めた戦いの後に臣民に与えた喜びを今でも誇りに思っております。そして我々臣民は、今から既に貴方が帰還後に我々にお与え下さる勝利の喜びを味わっております。貴方の勝利が不動のものであり、我々は勝利の印を見慣れているので、この度の蛮族追討のための出征が幸運な結果に終わるであろう事も、我々にはよく分かっております。そして我々は、貴方の行動から二重の喜びを受けることになるのです。貴方が行動を起こすとき、我々は勝利の歌声を響き渡らせ、貴方の行動が終わるとき、我々は喜びに満ちて拍手喝采を送るのです。それ故、どれほどの時間にせよ、貴方が我々の下を離れてしまうことになり、それが我々の心を深く揺るがそうとも、我々は貴方が蛮族追討に出征している間中、我々は祝いの歌を歌い続けるのです。鞭で打たれて当然の、性悪の奴隷が何をする事が出来るというのだ。もし勝利に満ちた皇帝、奴隷の主人たる貴方が彼らを討とうという時に、浅鉢が釜に対して何が出来るというのだ。むろん「浅鉢は山に向かって釜の上に倒れかかれ」と言い、嫌悪すべき予言を与えた丘に向かって「釜に覆い被され」というだろう（ルカによる福音書 23, 30）。優秀な狩人の手で野獣が居所を突き止められ、捕らえられるように、敵も貴方の軍勢により捕らえられるのだ。もうしばらくの間、我々は敵の居所を探し求めるが、まだ探し出せずにいることであろう。そしてその間、悪霊にとりつかれた敵は、悪魔ルシフェルのように大言壮語するだろう。そして北方の高い山の頂に玉座を据え、神に似た皇帝である貴方に対して悪魔となり、「貴方に対抗して玉座に座っていることであろう。」（イザヤ書 14, 13）

けれども皇帝よ、貴方は主キリストをもっとも敬い、勝利を重ねてきたこれまでの皇帝の誰よりも、これ以上はない危険に誰よりも先に立ち向かわれました。貴方は手綱を引き締め、野蛮人に立ち向かい、彼らが我々になした悪行に対して、何倍もの報復をされてきました。貴方は我々臣民のために出征され、その意志を何一つ変えることはありませんでした。貴方は辛苦も激戦も、シリウス星の出現も、シリウ

ス星の赤く燃える炎をも恐れず、急で人を寄せ付けず、歩行不能な高山も、狭くて、急な上り坂も恐れはしませんでした。これらのうちの何一つ貴方は恐れてはいませんでした。我々臣民は皇帝たる貴方にこう呼びかけます。「主が天上の高みから援軍を送ってこられます。貴方のために山を平らにし、行くことの出来ない道を歩けるようにして下さるのです」(イザヤ書 40, 4)、「主は青銅の門をうち破り、鐵のかんぬきを断ち切ってくださいるのです」(イザヤ書 45, 2)、「昼は太陽が貴方を撃つことはなく、夜は月が貴方を撃つことはありません。」(詩編 121, 6)、「貴方の手は諸々の敵を尋ねだし、貴方の右手は貴方を憎むものを尋ね出すでしょう(詩編 21, 9)、「敵は風の前の初殻のようになり、あなたの天使が敵を追いつめ、攻め立てることになるでしょう(詩編 35, 5)」、「そして敵に恐れとおのきが起るのです。なぜなら敵は思慮に欠けた民であり、「その行いによって姦淫をなした」(詩編 106, 39)者であり、敵は救い主たる神に離反した者だからです。敵は誓約を破り、神に似た皇帝をしばしば欺き通した者だからです。敵は「滅びる運命にある、怒りの器」(ローマ人への手紙 9, 22)なのです。もし貴方がこの度の、神に背いた者達への征討を終えられ、イストロスの対岸に住むスキタイ人に「心の願いを許すなら」(詩編 20, 4) 嗚呼、皇帝よ、貴方は神に似たモーセのように、民の指導者として、もう一つのシナイ山であるハイモス山脈の谷間から帰還されることでしょう。

貴方は、貴方の槍で蛮族の魂をまるで鑿のようにこすり取り、その魂を柔軟にし、以前の隷属の掟を石版に彫り込むように彼らの心に書き込むことでしょう。

偉大な、名誉に満ちた勝利が、当然の事ながら、第二の、幸福に満ちた女王のように、貴方にもたらされることでしょう。そして我々臣民は、貴方のご尊顔を拝謁し、裕福な者のみならず、名もなき庶民も貴方の勝利を祝うことでしょう。

皇帝の玉座よ、永遠なれ！ 貴方が皇帝でおられる日々が、天の日々と同じく永遠なれ！ 貴方の皇帝権が永遠ならんことを！

この賞讃演説を歴史の史料として読むと、きわめて不満足なものであると感じられます。なぜならこの演説には曖昧な史実がなく、具体的な名称も不足し、また遠征がいつの年に起きたかも知ることが出来ないからです。著者ニケタスの見解も全く書かれていません。あるのは繰り返される皇帝賞讃とビザンツ帝国賞讃のみと言っても過言ではありません。こうした傾向は他の多くの皇帝賞讃演説にも見られる共通の特色です。

ここからは、皇帝賞讃演説が歴史の史料として書かれたのではないことが明らかとなります。皇帝賞讃演説には、全く別の目的があったのです。ニケタスの演説は、他の賞讃演説と同じように、宮廷の大広間で皇帝列席の下に朗読されました。その際聴衆たる臣下一同は、皇帝がいつ(1190年)どこへ(ドナウ北岸)どの異民族(ブルガール族とヴァラキア族)を征討に行くかは事前に承知していました。ですから演説の中でそれらについて述べる必要は全く無かったのです。演説では皇帝が神にも似た存在であり、太陽や軍神アーレスにも比すべき存在であると褒め称えられます。そして皇帝が勝利の凱旋を飾ることは当然のこととされ、皇帝座が永遠に存続してほしい、という希望が述べられます。つまり演説では皇帝の偉大さ、ビザンツ帝国の支配者の偉大さが強調され、ビザンツという国家が永遠に存続してほしいという希望が繰り返し、強

く述べられます。そうした希望にはさらにビザンツ臣民すべての偉大さとその存続が暗示されます。皇帝賞讃演説では、現皇帝とその治世の安泰を、ひいてはビザンツ帝国の安寧と永遠の存続を願うことがその最大の目的でした。そして修辞学上の技巧や古典作品の応用もこうした演説の至る所に散りばめられたのです。ギリシャ正教的恩寵皇帝理念やローマの伝統が声高に叫ばれたのもそのためでした。重要なのは、演説の内容そのものというよりも、儀式としての演説それ自体であったとも言えましょう。つまり、聴衆たる臣下一同は皇帝賞讃演説を聴く度に、皇帝の偉大さと自らの国家の偉大さを再認識し、さらにはその安寧と存続に思いをはせ、そして最終的には「ローマ人」であり、「神に守られた臣民」としての自己了解を再確認したのです。

ビザンツ知識人は、自らの国家の正統性とその存続を願う気持ちを皇帝賞讃演説の他に帝王学、甲辞、書簡、歴史叙述、随筆、法律全集の序文や外交文書の序文などに書き込みました。さらには皇帝の結婚式の祝辞、皇帝や皇太子の戴冠式の祝辞、教会暦の祝日に行われた公開の演説、黄金文書の作成と発表などにあっても、「皇帝よ永遠なれ、国家よ永遠なれ！」という希望が繰り返し述べられました。こうした皇帝賞讃演説とその朗読は、文学作品としての形をとりながらも、実は現体制の維持と国家の永続を願うというきわめて強い「政治的」意味を持っていたのです。ここに皇帝賞讃演説とそれに連なる一連の著作が、全ビザンツ時代を通じて連綿として書き継がれた背景があるといえるのです。また知識人達も強い使命感を持ってそうした皇帝賞讃演説やそれに連なる作品を書き続けたのです。

第四回十字軍による首都占領に遭い、ニカイア市への亡命を余儀なくされた高級官僚ニケタス・コニアテスも修辞学の技巧を最大限に活用し、華麗な文章で合計七つの皇帝賞讃演説を残しています。皇帝イサキオス二世アンゲロスには四編、皇帝アレクシオス三世に対して二編、皇帝テオドロス一世ラスカリスに対して二編という具合です。

4) ビザンツ・ヒューマニストのイタリア滞在

15世紀に入ると、コンスタンティノープルとカトリック世界の交流はそれまでになく頻繁となります。ビザンツ世界がオスマン帝国に攻め寄せられ、窮状に陥るとともに、ビザンツ皇帝がローマ教皇に東西教会再統一と交換に軍事援助を依頼する機会が多くなったからです。東西教会再統一は、ビザンツ国内の保守派からは「信仰を政治の犠牲にする」とされ、反対されました。賛成派はローマ教皇の力を借りて、軍事援助を引き出すことを期待し、そのためにはローマ教皇の首位権をも認める用意がありました。仮にこれらの人々を「西欧派」と呼ぶと、そうした西欧派の中に修辞学を治めた知識人がおり、彼らの中からイタリアに滞在し、ギリシャ語とギリシャ文学を教授する者が出てきました。⁶ここではそうした西欧派に属する二人の人物を紹介することにします。言うまでもなくこうした人々がイタリア人文主義者を育てるのに間接的な貢献をしたといえましょう。

⁶ D.G. Geanakoplos, *Greek Scholars in Venice. Studies in the Dissemination of Greek Learning from Byzantium to Western Europe*. Cambridge, Mass. 1962.

ア) マヌエル・クリュソロラス(Manuel Chrysoloras) — 外交官並びにイタリア人文主義者の教師。1350年頃生まれ、1415年4月15日、コンスタンツ市において逝去。皇帝マヌエル二世パライオロゴスの特使として、1394年或いは95年、ヴェネツィアに滞在。その時クリュソロラスは初めてイタリア知識人の間でその名を知られるようになりました。フィレンツェ市参事会員で、ギリシャ語とギリシャ文学に強い関心を抱いていたコルッチオ・サルターティ、パツラ・ストロッチそしてニコロ・ニコリ等の招きを受け、クリュソロラスはフィレンツェ市に3年間(1397年~1400年)滞在しました。その間彼はヴェローナのグアリーノやレオナルド・ブルーニといったイタリア人文主義者を育てたのです。ヴェルジェリオは1406年の書簡の中で、クリュソロラスをイタリアでもっとも優秀なギリシャ語およびギリシャ文学の教師であると絶賛しています。この時クリュソロラスは、ギリシャ語の教科書『ギリシャ語問答集』(Ερωτήματα τῆς Ἑλληνικῆς γλώσσης)を初めてギリシャ語で著しています。この問答集は16世紀までイタリアで広く使用されました。

皇帝マヌエル二世パライオロゴスは東西教会再統一と引き替えに軍事援助を得るべく、4年間(1399年~1402年)のヨーロッパ歴訪の旅に出ました。この時クリュソロラスも随行員の一人として、ヴェネツィア、パドヴァ、ボローニャといったイタリア諸都市並びにパリやロンドンにまで足をのびます。その後クリュソロラスはローマに留まり、ギリシャ正教からカトリックに改宗し、さらには1415年にコンスタンツ市で開催された公会議に出席するが、会議の開催中に客死しました。

イ) ベッサリオン(Bessarion) — 人文主義者にして、神学者。カトリック教会の枢機卿(1439年~1472年)。1463年以後は、名目上のコンスタンティノーブル総主教も勤めました。1399年乃至1400年に黒海沿岸のトレビゾンド市に生まれ、1472年11月18日、ラヴェンナ市で逝去します。高等教育を終了した後、1423年修道士となり、その後、輔祭と司祭に叙階され、さらにコンスタンティノーブルの聖バシレイオス修道院の院長となります。1437年、彼はニカイアの府主教となり、西欧派の一人としてフェララ・フィレンツェ公会議において指導的役割を演じ、東西教会再統一の宣言書の署名にこぎ着けました。その後ベッサリオンは、1439年カトリックの教えに改宗し、イタリアに留まります。彼は教皇使節などを歴任した後、1455年と1471年には二度にわたり教皇候補となったこともありました。

人文主義者としてのベッサリオンは、ギリシャ語とラテン語の双方で執筆活動を行い、ローマ市でアカデミーを主催し、ギリシャ語とギリシャ文学の普及につとめ、他方ではラテン語への翻訳活動にも従事しました。その著作には書簡、神学論、演説、アリストテレスの形而上学の一部の翻訳などがありますが、中でも『プラトン哲学を歪曲する人々への反論』は有名です。ベッサリオンはイタリアにおけるギリシャ人亡命者の保護者としても活躍し、ガザのテオドロス、トレビゾンドのゲオルギオスなどがその保護を受けました。ベッサリオンの写本収集は名高く、彼は死後482巻のギリシャ語写本をサン・マルコ図書館に遺贈しています。